

自己の映像を利用した英語プレゼンテーション改善に関する研究

—フィードバック方法による違いの検証—

小林 輝美^{1, 2}

¹ 教育テスト研究センター ² 杏林大学外国語学部

本研究では英語によるプレゼンテーションを改善するには自分自身を録画した映像を視聴することが有効であると考え、プレゼンテーションを録画した映像を視聴する際、ペアになって良かった点のみをフィードバックする群と良かった点と改善点をフィードバックする群に分けて比較した。フィードバックの方法による自己評価の違いはほとんどなく、良かった点のみを指摘しても、良かった点と改善点を指摘しても同じような効果を期待できる。ただし、良かった点と改善点をフィードバックする方が、発音、イントネーション、トーンといった英語に関わる項目がよく指摘されたものと思われることから、良かった点と改善点の両方をフィードバックする方が効果的であることが明らかとなった。プレゼンテーションを改善したい場合は、良かった点だけではなく、改善点も指摘することが重要であると考えられる。

キーワード：プレゼンテーション，映像，振り返り，自己モデリング，フィードバック

1. はじめに

学校、ビジネス、いずれの場においてもプレゼンテーションを実施する機会はある。プレゼンテーションを改善する方法の1つに、プレゼンテーションの様子をビデオ撮影するという方法が考えられる。以前はプレゼンテーションをビデオカメラを用いて撮影したものが、今日ではスマートフォンやタブレット PC などのモバイル端末で簡単に撮影や編集もできるようになった。撮影した自己の映像を視聴する際に期待される効果にモデリング(Bandura, 1969)がある。モデリングとは社会的学習理論の一部であり、他人の様子を見ることで学習することができるというものである。メディアの発達につれ、映像を通じてもモデリングが可能となった。さらに、映像を利用することで他人だけでなく自分自身をモデリングする自己モデリング(Dowrick, 1983)も可能である。

映像を使用した振り返りの研究では映像の内容に注目されるものが多いが、どのように映像を視聴するかも考慮する必要がある。小林(2017a)によると映像を視聴する際、自分1人で視聴しながら良かった点と改善点を記述する群とペアで視聴しながら良かった点と改善点をフィードバックする群を比較すると、1人よりもペアで視聴した方がより多くの項目で自己評価が高くなることが明らかになっている。また、小林(2017b)ではペアで視聴する際、良かった点のみをフィードバックする群と改善点のみをフィードバックする群を比較すると、良かった点を指摘する群でのみ自己評価が高くなることが明らかになっている。これらの研究から、映像を視聴する際は1人よりもペアで、良かった点を指摘することが効果があると思われる。相互評価では相手も自分を評価する場合、そうでない場合に比べて相手に高い評価値をつける場合があり(藤原, 2007)、良かった点を指摘してもらうことで自信を付けるなど、心理的な面で利点があることは理解できるが、プレゼンテーションそのものを改善するには改善点にも気付く必要がある。そこで、自分だけでは気付かなかったことをパートナーから指摘してもらうことが有効ではないだろうか。

2. 目的

良かった点だけをフィードバックするよりも良かった点と改善点をフィードバックする方がプレゼンテーションが改善されるだろうと仮説を立て、プレゼンテーションを撮影したビデオを視聴する際、どのようにフィードバックするのが良いのかを検証する。

3. 方法

3.1 実験デザイン

東京都内の大学に所属する学生 60 名（男性 30 名，女性 30 名）に英語でプレゼンテーションを行ってもらった。最初に自己紹介をするためのプレゼンテーションの簡単なテンプレートを配布し，原稿を作成した。次に，プレゼンテーションを評価するためのチェックシートを提示し，原稿を暗記することが望ましいと伝えた上で，プレゼンテーションの準備をしてもらった。ペアになり，お互いのプレゼンテーションを各自のスマートフォンで撮影した。撮影した映像を視聴する際，ペアで良かった点だけをフィードバックする群（統制群，男女各 15 名）とペアで良かった点をフィードバックした後に改善点もフィードバックする群（実験群，男女各 15 名）に分けた。フィードバックを受けた後，各自で自分のプレゼンテーションについて自己評価した。

3.2 調査内容

練習時と本番時のプレゼンテーションのビデオについて18個の評価項目を用意し，5段階で回答してもらった。（1. まったくそう思わない，2. あまりそう思わない，3. どちらとも言えない，4. 少しそう思う，5. 非常にそう思う）評価項目は以下の通りである。「よく準備をした。」，「暗記できた。」，「内容が適切だった。」，「自信を持って発表できた。」，「快適だった。（緊張などせず，気持ちよくできたかどうか）」，「アイコンタクトを取ることができた。」，「ジェスチャーが適切だった。」，「表情が適切だった。」，「身だしなみが適切だった。」，「姿勢が良かった。」，「声の大きさが適切だった。」，「声をはっきりしていた。」，「流暢だった。」，「発音が適切だった。（カタカナ英語ではなかったかどうか）」，「イントネーションが適切だった。（疑問文ではない所で上がらない，など）」，「トーンが適切だった。（低すぎない声だったかどうか）」，「間が適切だった。」，「全体的に見て，適切なプレゼンテーションだった。」。

4. 結果

練習のプレゼンテーションと本番のプレゼンテーションの自己評価を SPSS Version 22 を用いて統計処理した。

4.1 実験群と統制群の比較

良かった点のみをフィードバックする群と良かった点と改善点をフィードバックする群の評価を比較するために，対応なしの t 検定(5%水準)を行った。有意差が見られたのは，練習のプレゼンテーションの「全体的に見て，適切なプレゼンテーションだった。」の 1 項目であった。

4.2 練習と本番のプレゼンテーションの比較

実験群，統制群共に全ての項目において練習よりも本番のプレゼンテーションの自己評価の方が高かった。練習と本番のプレゼンテーションの評価に差があるかどうか検証するために，群ごとに対応ありの t 検定(5%水準)を行った。統制群（良かった点のみをフィードバックする群）では 10 項目で有意差が見られた。「よく準備をした。」，「暗記できた。」，「自信を持って発表できた。」，「快適だった。」，「ジェスチャーが適切だった。」，

「表情が適切だった。」，「姿勢が良かった。」，「声の大きさが適切だった。」，「流暢だった。」，「発音が適切だった。」。一方，実験群（良かった点と改善点をフィードバックする群）では10項目で有意差が見られた。「よく準備をした。」，「暗記できた。」，「自信を持って発表できた。」，「快適だった。」，「姿勢が良かった。」，「声の大きさが適切だった。」，「発音が適切だった。」，「イントネーションが適切だった。」，「トーンが適切だった。」，「全体的に見て，適切なプレゼンテーションだった。」。

5. 考察

実験群と統制群を比較した際，有意差があった項目が1つしかなかったということは，フィードバックの方法による自己評価の違いはほとんどないと思われる。良かった点のみを指摘しても，良かった点と改善点を指摘しても同じような効果を期待できる。

練習と本番のプレゼンテーションの評価について，実験群と統制群の両群で有意差があったのは7項目であった。「よく準備をした。」，「暗記できた。」，「自信を持って発表できた。」，「快適だった。」，「姿勢が良かった。」，「声の大きさが適切だった。」，「発音が適切だった。」。

実験群（良かった点と改善点をフィードバックする群）のみ有意差があった項目は4項目であった。「発音が適切だった。」，「イントネーションが適切だった。」，「トーンが適切だった。」，「全体的に見て，適切なプレゼンテーションだった。」。統制群のみ有意差があった項目は3項目であった。「ジェスチャーが適切だった。」，「表情が適切だった。」，「流暢だった。」。実験群では良かった点と改善点を言っていることから，改善点と発音，イントネーション，トーンといった英語に関わる項目がよく指摘されたものと思われる。

6. まとめ

本研究ではプレゼンテーションを録画した映像をペアで視聴する際，良かった点のみをフィードバックする群と良かった点と改善点をフィードバックする群に分けて比較した。フィードバックの方法による自己評価の違いはほとんどなく，良かった点のみを指摘しても，良かった点と改善点を指摘しても同じような効果を期待できる。ただし，良かった点と改善点をフィードバックする方が，発音，イントネーション，トーンといった英語に関わる項目がよく指摘されたものと思われることから，良かった点と改善点の両方をフィードバックする方が効果的であることが明らかとなった。プレゼンテーションを改善したい場合は，良かった点だけではなく，改善点も指摘することが重要であると考えられる。

参考文献

- Bandura, A. J. (1969) Principles of behavior modification. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Dowrick, P. (1983) Self-modeling. In Dowrick, P., & Biggs, S. (Eds.), Using video: Psychological and social applications. New York: Wiley Interscience.
- 藤原康宏, 大西 仁, 加藤 浩 (2007) 公平な相互評価のための評価支援システムの開発と評価—学習成果物を相互評価する場合に評価者の選択で生じる「お互い様効果」—, 日本教育工学会論文誌, 31 (2): 125-134
- 小林輝美 (2017a) 自己の映像を利用した英語プレゼンテーション改善に関する研究—1人とペアでは映像視聴の際にどのような違いが生じるか—, 教育テスト研究センター年報, 2: 58-60
- 小林輝美 (2017b) 自己の映像を利用した英語プレゼンテーション改善—視聴時の指摘方法の比較— 日本教育工学会第33回全国大会講演論文集, 163-164